

砂上の楼閣―「満州国」崩壊

1945年8月9日、ソ連軍が満州に侵攻し一路ハルピンや新京(現長春)、奉天(現瀋陽)をめざし、怒涛のごとく進撃していました。ソ連参戦1週間後の8月15日、日本政府はポツダム宣言を受諾し、連合国に無条件降伏しました。大日本帝国と関東軍の後ろ盾をなくした「満州国」は崩壊せざるを得ませんでした。執政(のち皇帝)溥儀は、臨江郊外の大栗子で形ばかりの退位式を行い、こうして13年5ヵ月あまりの寿命を終えました。

その後、溥儀は日本への亡命寸前にソ連軍に拘束され、ハバロスクの収容所に送られています。1949年10月、中華人民共和国が成立した翌年8月、ソ連は溥儀の身柄を中共政府に引き渡しました。

1956年6月、中国太原の特別



軍事法廷は日本の戦犯を審理

溥儀をはじめ「満州国」の大臣、それを陰で操っていた日本人関係者は戦犯として撫順戦犯管理所に勾留され、中国の軍事法廷で裁かれました。

遼寧の撫順戦犯管理所

日本戦犯は太原特別軍事法廷で慟哭、罪を全面的に認めました。

撫順戦犯管理所でつくろいをする溥儀



最高人民裁判所瀋陽特別軍事法廷で撫順戦犯管理所に勾留中の「満州国」かいらい政府総務庁長武部六蔵ら28人の日本戦犯を公判。出廷した証人は中国人27人、日本戦犯西村哲夫ら9人、「満州国」皇帝溥儀と大臣干静遠(かんせいえん)、閻傳絨(えんでんふつ)ら12人。



被告全員が証人の証言をすべて事実であると認め、古海忠之(元「満州国」国務院総務庁次長、皇帝溥儀の直接の操縦者)は法廷で4回頭を下げ、2回慟哭して自分の罪を後悔していた、と記録されています。溥儀も泣きながらすべての罪状を認めました。(写真は『中国抗日战争図誌』下巻柏書房より)

関連ホームページ

[ウィキペディアフリー百科事典](#)

[撫順戦犯管理所\(ぶじゅんせんぱんかんりしょ\)](#)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/撫順戦犯管理所>

